

令和 5年 9月 29日

亀山市議会議長 森 美和子 様

研修報告書

会 派 名	豊田 恵理
報 告 議 員 名	豊田 恵理
参 加 議 員 名	豊田 恵理
研 修 日	令和5年8月2日 ～ 8月3日
研 修 目 的 等	全国若手議会議員の会OB会 研修会 場所：大洲市議会 全員協議会室
研修の概要	
歴史的建造物の保全と利活用について 担当課からの説明（大洲市まちづくり課）	
■大洲市概要と過程 大洲市は愛媛県西南部に位置する人口4万人の市であり、肱川を中心に栄えてきた。すでに人口は減少傾向であったが、平成30年7月に起きた西日本豪雨災害の影響で浸水面積が1300haを超える甚大な被害を受けた。その後、まち・ひと・しごと創生総合戦略のうち地方創生推進交付金を活用してまちの再生に取り組む中で、歴史的建造物の保全と利活用に力を入れてきた。 大洲市は、城下町の歴史が感じられるまちなみが残っている魅力的なまちであるものの、宿泊の目的はビジネスによる利用がほとんどであった。また、このまちなみでは、空き家所有者が県外に住んでいるなどの理由から、空き地化が進んでいた。 そんな中、まちの風景を残したい市職員と地元住民の団体「YATSUGI（やつぎ）」が、古民家の改修を積極的に動き出した。彼らは活動の情報発信など行いながら、古民家の修繕に必要なDIYのスキルを学ぶワークショップを実施したり、古民家を活かした手作り作家によるイベントをしつつ、古民家のマッチング事業につなげて徐々にまちなみを再生し、活動仲間を増やしていく。 修繕を進めその町家を活用していくためには、町家ディベロッパーの必要性が生じ、活動を続けていくためには資金問題が生じ、様々な課題も動きながら向き合っていく中で、国の地域連携室に融資の相談し、市と銀行の勉強会を行うようになった。	

■大洲市の取り組みに関する中間組織（ビークル）の役割分担

持続可能なまちづくり観光を行うためには宿泊コンテンツが重要、日帰りでは儲けが出ない。また食材燃料、輸送、高単価であればあるほど地域に影響を与える。そのため民間からの投資を得るためのスキーム作りが重要だった。

まず国から歴史的資源を活用した観光まちづくり連携推進チームを派遣してもらい、外部からも様々な知見を得た。その中で宿泊施設を設ける必要性を確認し、資金とプレイヤーの必要性から地域未来投資促進法を活用できることが分かった。

<連携協定を結んだ組織とそれぞれの役割>

- ・バリューマネジメント：歴史的資源の活用に長けている。
- ・一般社団法人ノオト：町家・古民家の活用等のノウハウ。
- ・伊予銀行：資金提供等の支援

それぞれ役割分担をしつつ地域再生計画を作成し、空き家を改修してホテルの客室・フロント・食堂・土産屋にするなど、観光客がまち全体を循環する仕組みを作った。また地域住民の中から飲食店や雑貨屋、地ビール屋が生まれ、観光客がまちなみを歩きながら地域の人々の生活に触れることもできる環境もできた。こうして文化財を活用し、文化財が自らお金を稼ぎ出す、観光を手段としてまちを保全するサステイナブルな観光の仕組みが出来上がった。

■キャッスルステイについて

バリューマネジメント・ニッポニア総務 横山さん（企業人人材派遣制度で出向）からの説明

■キャッスルステイの経緯

今まで見るだけだったまちなみ・文化財を、これからはしっかり利用・活用し、保存のために利活用していかねばいけないという動きがあり、観光でまちづくりを進めていこうという取組が国でも進められている。

大洲市の名を世界中に広めるにはどうしたらいいか。分散型ホテルだけでは弱いので、もっとインパクトのある取り組みが必要である。大洲市でも歴史的資源を活用し、「観る文化財から利用する文化財へ」の転換する取り組みの一環としてキャッスルステイ（2人100万円でお城に泊まる体験型ツーリズム）を計画した。これがきっかけで大洲の名が世界に広がった（2023年3月にオランダの国際団体が選ぶ「世界の持続可能な観光地」で世界1位受賞）。大洲城は明治21年に老朽化を理由に解体されたが、平成16年に市政施行50周年記念事業として住民の思いで復元（寄付額5億円）、ストーリー性のある城で、一度壊れたが作り直した木造天守というのも珍しい。

■取り組み

お城を活かした1日城主を体験してもらい、無形文化財の鑑賞、自ら五感で体験してもらいことをモットーにこのプロジェクトは始まった。

まずは市議会の承認や、条例整備、地元の理解が必要であり、法整備等も国を含め各関係団体と検討しトライ&エラーで令和2年からようやく実施に至る。火元や電源、水場がない等の課題があったが、料理においてはお城のすぐ近くまでキッチンカーを持ってきて地元産の食材を用い、なるべく実際に当時の城主が食べていたものを史実に忠実に再現する(殿様御膳)。お手洗いはトイレカーを配置。お風呂だけは用意できないため、二の丸に仮設コンテナを配置し、プライベート空間でバスタイムを満喫してもらいようにした。ここからはライトアップされた城が見られる。天守1階で就寝する。

他の対応としては地元住民と連携しておもてなしを実現している。ただお城に泊まるだけでなく入城体験の演出として、地元住民が扮する甲冑家臣団によるお出迎えをする。入城には法螺貝をふき、家老が城主証を渡し、火縄銃による祝砲で歓迎などを行う。

この取り組みは、お城の一般公開を終えた17時以降に、年間30回の限定で行われている。100万円の内訳については、具体的には人件費が6割以上、オプションで神楽体験や花火の打ち上げ等も可能。残金は6%ほどで、この収益が無形文化財、伝統芸能の継承も含む文化財保護につながっている。

実績としては、令和5年の7月末までで26組が宿泊(うちインバウンド2組)しており、予約は現在7組とのことであった。夏は暑くて冬はとても寒いので8月、12~2月は実施していない。

■感想

最初にこの視察に行こうとしたのは、テレビニュースの特集でこの大洲市の取り組みを見たことがきっかけである。亀山市の関宿と同じような歴史的まちなみがあり、その保存だけでなく活用にまで「分散型ホテル」という珍しいプロジェクトでうまく取り組んでいる様子が印象的であった。亀山市には約2kmにわたる関宿のまちなみがあるが、他市と同様に空き家が増え、まちなみの保存にも今後多くの費用がかかることが見込まれている。亀山市の財政事業も年々悪くなっていく中で、保存だけではこのまちなみを残すことができない。観光振興ビジョンにも記載してあるように、文化財の活用にまで目を向けて早急に動く必要があると考える。

亀山市は三重県の中でも観光には弱い。三重県には伊勢神宮や熊野古道など、世界的に有名な観光名所が多くあり、亀山市はついで観光的な側面が大きく、お金を落としてもらえていないのが現状だ。その要因は様々であるが、宿泊まで至っていない部分が多いであろう。だからと言ってこれから宿泊施設を新しく作っていくのは困難であるし、歴史的建造物を多く持つ亀山市はまさにこれらの文化財を活かし、それらを分散型ホテルとして活かすといった事業も一つの考え方として成り立つのではな

いだろうか。大洲市のようにキャッスルステイのような大きな事業はできなくても、亀山市には歴史的風景だけでなく、素晴らしい自然、亀山七座や最近人気のあるキャンプ場施設もある。そういった魅力の数々を繋いでいくことで、宿泊につなげ、亀山市での滞在時間を増やしてもらうことを今後考えていくことが重要である。

また、これら大洲市の取り組みには多くの時間と人が関わっている。深い議論や試行錯誤を、年月をかけて行い成り立っている。計画に至るまでも市職員を始め地域の有志団体が危機感を持って活動を続け、その取り組みに市外の団体や銀行、県、国など様々な人たちが参加し大きなうねりを巻き起こしながら今に至っている。またその中で様々な国の補助金をうまく活用しているが、それに至る計画もとても緻密に練られているのが分かった（資料別途添付）。やはり目的や目標、何を大事にしていくかなどをしっかりと確認し、一丸となって進めていくことが重要であると感じた。

今回視察に伺い、今もまだ課題は多いことも感じた。分散型ホテルの目標稼働率は30～40%だというのが、実際2021年以降は、繁忙期は40%、閑散期は20%を切るのではどうやって今後やっていくかが勝負だという。海外の団体旅行客を誘導できればと思っているが、平均で20%前後の稼働率だということだ。Gotoキャンペーンがあったのでその恩恵で11～12月は稼働率90%を超えたようだが、海外勢の観光ライバルも大きく成長している。

亀山市が今後観光においてどのように取り組んでいくかまだ先行きが見えないが、文化財の活用については早急に取り組んでいくべきだ。大洲市の取り組みだけでなく、最近では日本国内でもキャッスルステイのような体験型のアドベンチャーツーリズムが話題になりつつある。アドベンチャーツーリズムの良いところは、地域独自の自然や地域のありのままの文化を体験し、環境や地域住民へ負荷をかけずに理解を育むことが主眼とされるので、観光と生活が混在する関宿には適している。今後も大洲市のこれらの取り組みの行方を追っていきたい。

